

ハバクク預言書

たいがいの小預言者がそうであるように、ハバククの生涯についてもあまり知られていない。近代の聖書解釈者たちは、この人がダニエル書第十四章第三十二節以下に記してあるハバククとは別人であるとしている。ある人々は第三章にある祈りの文体から、かれが司祭か少なくともレヴィ族の人であつたと結論していいと考えている。とにかくその活動した時代は、カルデア人がシリアおよびユデアに侵入する前で、キリスト御降生前七世紀の末、ほぼ六百二十年頃であつた。

第一章

ハバクク民の邪悪を嘆く——天罰カルデア人によりて下る

二一 一 預言者ハバククの見し重荷。1)ニ主よ、我呼ばわるとも汝聴
 き容れんとし給わざるは、そも何時までぞや。我暴虐を忍
 びながら汝に向かいて声をあぐるに、汝救わんとし給わざる
 か。三 汝何とて我2)に不義と艱難とを示し、わが前に掠奪と
 不正とを見せ給うや。是非論ぜられて、諍いますます激烈を

第一章 1) 賽一三・一。耶
 二三・三三とその註、更に
 翁一・一参照。——2) ハバク
 クは、ユダで信仰に忠実な
 ため迫害されている人々を
 代表して語る。

四 加う。この故に律法は破られ、是非の論は終りに至ることなし。悪人義
 人に勝つが故に、邪曲なる裁判行わるるなり。五 汝等諸国民の間を眺め見
 て、³⁾ 驚き呆れよ、そは、語りたりとて誰も信ぜざるべき一つの業、汝等
 の日に行わるればなり。六 実にも視よ、我カルデア人を起さんとす、是即
 ち残忍酷烈なる国民にして、己が有にあらざる住処を奪わんと、地を遍く
 馳せめぐる者なり。七 そは恐るべく慄くべし。その法⁴⁾と威力とは己より
 出でん。八 その馬は豹よりも身軽にして、暮時の狼よりも疾し。その騎兵
 は遠征せん、実にその騎兵は遠方より来り、獲物に襲いかかる驚の如く、
 九 飛び来るべし。九 彼等は皆掠奪の為に来らん、その面は熱風の如し、彼等
 捕虜等を砂の如くに集むべし。一〇 そは王等を降して凱歌を奏し、諸侯を嘲
 り、すべての砦を唾い、壘を築きて之を取らん。二次いでそは意気を新に
 して出征き、ついに潰滅ゆべし。⁵⁾ その己が神より受くる力、是の如し。
 二三 主、わが天主、わが聖なる者よ、汝は元始より在せるにあらずや、さら

3) 天主のお答
 え。 — 4) 彼ら
 は自分の好む
 所を最高の掟
 としてゐる。
 5) 少しも予想
 しなかつたの
 に滅びが待つ
 ている。ヘブ
 レオ語本は
 「罪を獲ん」。

一三 ば我等死せじ。主よ、汝は裁かん為に之を立て、懲らさん為に之を強
 くし給えり。二三 汝は御眼清くして、悪を見るに堪えざれば、不義をみそな
 わす能わず。然るに何とて不義を行う者を見遁し、不敬なる者が己より義
 一四 しき者を呑み尽す時にも黙し居給うや。一四 汝は人々を海の魚の如く、君
 一五 なき爬虫の如くになし給わんとす。一五 彼、之を悉く鉤もて釣りあげ、その
 引網に入れて引きあげ、その網に集め入れたり。彼是に由り欣びて雀躍せ
 一六 ん。一六 故に彼、その引網に生贄を献げ、その網に物を供えん、そは是等
 一七 によりてその分豊かになり、その食料を集むるに至りたればなり。一七 され
 ばこの故に彼その網を張り、絶えず諸国民を容赦なく殺さんとするなり。

第二章

天主カルデア人の滅亡を告げ給う

一 我わが望楼に立ち、櫓の上に足を据えて見張をなさん、そは我に何と告
 げられんか、
 二 我を責め給う者に何と答えんかを見んためなり。
 三 時に主

6) 全く滅びる
 ことはあるま
 い。一七) カル
 デア人。
 8) 保護者。
 9) カルデア人
 はおのが力を
 神とした。

第二章 一) 天
 主から。

三 我に答えて曰いけるは、この幻示を録して、之を板の上に明らかに表し、走りながらも之を読み得るようにせよ。三この幻示のことはなお遠きにあり、されど終には事実となりて現れ、虚偽となることあらじ。もし遅ることあらば、之を待つべし、そは必ず来るべく、停滞することあらざるべければなり。四視よ、信ぜざる者は、その身にある靈魂直からじ。されど義人はその信仰によりて活くべし。五葡萄酒が之を飲む者を迷わす如く、高ぶる人もまた然らん。かかる人は榮譽を得じ。彼はその欲望を冥府の如く広くせり、且彼は死の如くにして飽くことを知らず、ただ万の国人を己が許に集め、万の民を己が許に寄せ集えんとするなり。六是等の者みな彼のことを云うに譬喩を使い、謎めきたる諷刺の言を用いざらんや。即ち云わん、己が有にあらざる物を蓄積する者は禍なるかな。いつまでかかる者は厚き糞土³⁾を身に負うべき。七汝を咬む者俄に起り、汝を裂き、汝を掠むる者奮起たざらんや。八汝多くの国民より掠奪したれば、民の中にて遺りたらんほどの者は、みな汝より掠奪せん。是、汝が

2) 羅一
 二七。
 3) ヘブ
 レオ語
 本「質
 物」。

九 人々の血を流したると、その国、その都市、及びそこに住める者に不義
を行いたるに由るなり。九 高き処に己が巢⁴⁾を設けんと、強慾非道もて

一〇 己が家に財を集め、災厄の手を免るべしと思ふ者は禍なるかな。一〇 汝は

己が家に恥辱となる事を思い立ち、多くの民を絶滅したり。かくて汝の

二 霊魂は罪を犯せり。二 実に石垣よりは石叫び、建物を組み立つる木答え

一三 血もて都市を建て、不義もて邑を設くる者は禍なるかな。一三 そ

れ、諸民は大火の為に、⁶⁾ 諸国人は空しき事の為に勞して衰えん、是、

一四 万軍の主によるものにあらずや。一四 実に人々が主の栄光を認むべき知

識、水の海を掩うが如く、地に充ちわたらん。一五 友に葡萄酒を与え、そ

の裸体を見んとして⁷⁾ 之に己が胆汁を混えて酔わす者は禍なるかな。

一六 汝は榮譽にあらずして恥辱に飽けり。汝もまた飲みて眠れ。主の御右

手の酒杯⁸⁾ 汝に巡り来り、汝の恥かしき嘔吐汝の榮譽を掩わん。一七 それ、

一七 汝がリバノンになしたる不義⁹⁾ 汝を覆い、獸に与えし絶滅人々を怖れし

4) 大宮殿や城砦

5) 不当に宮殿を

造る材料とされ

たので、黙つて

いられない。

6) 火で焼け滅び

るにきまつてい

る建築物を造営

するため。

7) 裸体にすると

は、人に加え得

る最大の侮辱。

8) 「おん怒りの

酒杯」。耶二五

・一五参照。

9) 荒らしたこと

一八 義ぎを行おこないたるとに由よるなり。一八 彫像ちようざうはその作者さくしや之これを刻きざみたりとて、また鑄物いものおよ及び偽神にせがみの像ぞうは、物云ものいわぬ偶像ぐうざうを作るその作者さくしや、己おのが拵こしらへたる物ものを頼たのみたりとて、何なんの益えきかあらん。
 一九 木きに向むかいて、「目めざめ給たまえ」と云いい、物云ものいわぬ石いしに向むかいて、「起おき給たまえ」と云いう者ものは禍わざわいなるかな。教おしうる力ちから是これにありや。視みよ、そは金銀きんぎんを被きせたるものにして、その腹はらの中なかには全まったく気息いきなし。二〇 されど主しゆはその聖殿せいでんに在ます、全地ぜんちはその御面前みまへに黙もくせよかし。

第三 三 章

世の支配者に対する天主の御審判

一 識しらざる事ことの為ためにする預言者よげんしやハバ
 二 ククの祈いのり。主しゆよ、我われ汝なんじの聞きかせ給たまえ
 三 事ことを聞ききて懼おそれたり。主しゆよ、
 四 この幾年いくとせの間に、汝なんじの御業みわざを活いかし給たまえ。
 五 汝なんじはこの幾年いくとせの間に、之これを知ら

第三章 一)ヘブレオ語「シツガヨン」。「哀歌」などと
 いうように、曲調を示す。詩一〇一・一。七。一など
 参照。二)天主がカルデア人の手でユデアに下さんと
 し給う罰についての預言。三)なんじの御旨を実行し
 給え。四)かれに臨んでいる時代が経過する内に。即
 ち試練の時短くなるよう早く。

三 せ給わん。怒り給える時にも、憐む事を憶い給わん。三 天主
 南より、⁵⁾ 聖なる者^{もの}フアランの山^{やま}より、来り給わん。その
 栄光天を蔽い、その讚美地に満ちたり。⁷⁾ ⁴⁾ その輝は光の如く
 ならん、その御手には角あり。御権能は彼処に隠れたり。
 五 死その御面の前に立ちて行き、悪霊その御足の前より出で
 六 彼立ちて地を測り、⁹⁾ 望見て諸国民を散らし給えり。
 七 世々を経し山は砕け飛び、世界の丘はその永遠の御歩行¹⁰⁾ に
 よりて陥没れり。七 我不義¹¹⁾ の報を受けし、エチオピア¹²⁾ の
 天幕を見たり。マデイアンの地の革幕は揺れ動かん。八 主よ、
 汝河に向かいて怒り給えるか。即ち汝の猛り立ち給えるは河
 に向かいてなるか、それとも汝の憤り給えるは海に向かい
 てなるか。汝は馬に乗り給う、汝の御車は救済なり。九 汝は
 必ず御弓を執り給わん、そは汝が諸族に曰える御誓言なれば

5) シナイの地方から。ヘブ
 レオ語本は「テマンより」。
 6) エドムと南パレスチナと
 の間の荒涼たる地域で、し
 ばしば天主の奇跡の起こつ
 た所。——7) ヘブレオ語本で
 はここにセラとある。多く
 の詩篇中にあつたように音
 楽上のしるし。——8) ヘブレ
 オ語本「ペストその前に先
 立ち行き、疫病その歩みに
 従う」。——9) 一將軍がその占
 領地に対してするように。
 10) 天主の永遠の御計画。
 11) ヘブレオ語本「禍」。
 12) マデイアン人に近い一民
 族クシヤン。

一〇	なり。13) 汝は地の河川を分ち給わん。一〇 汝を見るや、山は嘆き、渦
一一	巻く水は流れ去り、淵はその声を発し、深処はその手を挙げたり。
一二	二日も月も汝の矢の光によりて、その住処に立ち留りしが、14) 汝の
一三	燦く槍の輝きによりて進み行くべし。一二 汝は怒りて地を踏みにじり、
一四	猛り立ちて諸国民を愕かし給わん。一三 汝は汝の御民を救わん為に、
一五	汝の注油し給える者15) をもて救わん為に出で来り、不敬なる者の家
一六	の頭を打ち砕き、その基礎より頸に至るまで之を露にし給えり。16)
一七	汝は彼の王笏を、その戦士等の頭を、我17) を散らさんとて旋風の
一八	如く寄せ来りし者等を、呪い給えり。彼等の歡喜は、貧しき人を密
一九	かに呑み尽す者のその如し。一五 汝は御馬のために、海の中、大水
二〇	の泥の中に道を備え給いぬ。18) 一六 我聞くや、わが腸九回せり、そ
二一	の御声にわが唇戦きたり。腐敗わが骨に入り、わが下体蠢動けよ
二二	かし。かくてこそ我患難の日にも安んずべけれ、かくてこそ我身を

13) 三節同様、セラ。

14) もはや輝かなくな
る。 — 15) 天主の注油

し給うた者とは、こ

こではキルスまたは

メシアを意味するの

である。 — 16) 第三

のセラ。 — 17) ハバク

クはここで全イスラ

エルを代表して言

う。 — 18) カルデア人

からの救助がエジプ

ト人からの救助に譬

えてある。

一七 鎧たる¹⁹⁾ 我等の民の許にも上り行くべけれ。一七 実に無

花果樹は花咲かず、葡萄の樹は芽ぐまず、橄欖の樹の

栽培は空しくなり、田畑は食物を供せず、檻には羊絶

一八 え、小屋には牛なきに至るべし。一八 されど我は主によ

りて喜び、わが救済者なる天主によりて雀躍せん。

一九 主なる天主はわが力なり、彼わが足を鹿の如く²⁰⁾ に

なし給わん、勝ち給う者、我を高き処に導き給わん。²¹⁾

されば我彼に琴歌唱い奉るべし。²²⁾

19) 帰国しようとして旅仕度を整え「帯して」、去らせて貰える民。——20) 鹿の走る速さは意気揚々と帰国する時の喜びの象どり。——21) 確実にその地を領すること。——22) ヘブレオ語本「歌隊長(うたのかみ)に」。この語はいくつかの詩篇の前書きにもある。